

働くことが愉快になるオフィスを考える

～働くことに誇りを持てるオフィスのあり方～

オフィスと都市環境の関連性

オフィスで働く時間は、家で過ごす時間よりも長い。このため空間を何とか楽しいものにしたい、と日頃から考えている。その視点からオフィス空間に対して考えていることを述べていきたい。

まず、オフィスビルのあり方について、私どもが大切に考えているポイントを整理してみる。

一つは、個性的な建物であるということ。これは言い換えればアドレス性のようなもので、立地や周囲の都市環境と深く関わりながら、その建物が放つ固有のイメージである。オフィス環境という大きなイメージの中で考えてみると、大事なことだといえる。特に米国や中国での仕事の場合は、インパクトのある、記憶に残る外観ということ、非常に大事に考えてデザインしている。

2番目は、都市環境を向上させる建築物であること。オフィスビルは知的な価値を生み出す場所であるが、同時に、社会的存在としての価値、存在意義も非常に大事だといえる。

新たなオフィスビルができることで、都市環境もまた生まれ変わる。そのコミュニティの中での評価は、新しいオフィス空間で働く人々の意識に大きな影響を与える。

3番目は、私たちが「空間のシーケンス」と呼ぶ、空間の連続性である。人は、最寄り駅を降り、歩道を歩き、自分の会社のフロントに到達し、自らのオフィスへと歩いていくわけだが、それを一連の空間の連続性として、ストーリーを考えていくこと、これが空間のシーケンスでありオフィスづくりの中で大変重要なことではないかと思っている。

都市との接点を的確にデザイン

社会からオフィス空間に求められているものは何だろうか。

それは業務の知的付加価値、つまり質を高めることである。その質を生み出すために求められるのは、短時間に高い効率を上げられる仕組みづくりである。

そして、今までになかった新しいアイデアを生み出せるような場所であるかどうか。これもオフィス空間に求められる重要なポイントになってくる。

それらを踏まえ、デザインを、具体的に形としてつくっていくわけだが、そのときの方法論として私たちが考えていることをここに紹介してみる。

一つは、オフィスと都市の接点を的確にデザインすること。オフィスビルと都市は、様々なものを通じて関わっているが、オフィスビルという建築物は孤立してその場所に立っているわけではない。街やコミュニティとの関わり方をどうデザインに落とし込むか、そこが大きなポイントになる。先ほど述べたアドレス性ということになるが、個性と存在感を持った外観のイメージが、これからは更に求められていくだろう。どのような形であれ、建物の姿が街に現れたとき、その会社のアイデンティティが何らかの形で外に示されることになるのではないかと。また、その建物を通して、都市との関わり方も評価されるのではないだろうか。その評価が、内部にあるオフィス空間自体のあり方に影響を与えないはずはない、と考えている。

次なるポイントは「不変」と「可変」をしっかりと見定めること。テナントとしてのオフィス空間を考えると、専有部、つまり借りている空間自体は内装工事をして様々に変わっていく

光井 純

シーザー・ペリ アンド アソシエーツ
ジャパン株式会社 代表

が、不変な部分は設備のインフラやエレベーターなど大きな骨格部分のほかに、外観やロビー空間は共有部であるためなかなか変えられない部分である。

このように専有と共用とを大きく分けて考えると、都市空間におけるオフィスのイメージとしては、共用部のイメージが、これからは非常に重要になってくるだろう。

アドレス性をオフィス空間に活かす

今まで述べてきた視点で、私どもが関わってきた設計の仕事を幾つか見ていく。まず、東京・神谷町の愛宕グリーンヒルズから。

正面から見ると、右側にオフィス棟の大きなタワーがあり、左側に住宅棟タワー、そして2つのタワーの間には青松寺というお寺がある。お寺をはさんで、ちょうど仁王門のように、両側に守護神がいるような形で2つのタワー棟が立つ。そのように全体の構成を考えた。

タワーの上の方は少しすぼまった形になっているが、都市のスカイラインを考え非常に大事にしている部分である。

オフィス棟には外資系企業を入居させたいというオーナーサイドの考えがあり、その意味でもオフィス棟は装飾的である必要は全くなく、シルエット

本稿は去る1月27日に行われた講演の内容をまとめたものです。



を少し操作することで、非常に存在感がある建物をつくることができた。

住むところ、働くところ、そして少し精神的な部分。この3つを兼ね備えたことが、非常に面白いオフィス環境のあり方につながっていると思う。

愛宕グリーンヒルズの例は、愛宕山を背景にして伽藍が展開しているが、座禅堂を含め全体的に総合開発を行った。都市にある価値を、オフィス計画の中に活かすことで、単にオフィス空間、箱としてのオフィスビルをつくるという価値を超えることができている。

このように都市との関わり方の中で、オフィスのあり方やオフィス専有部分のあり方が、だんだん問われていくのではないだろうか。

中国で仕事をしていると、たとえば上海は非常にエネルギッシュに都市開発を進めており、オフィスビルが次々と竣工している。これからは北京での都市開発がどんどん伸びてくると思うが、そういう上海・北京・香港における都市開発を目の当たりにしたとき、東京はこれからどういう街をつくっていくのだろうかという思いに駆られる。

都市に立つオフィスは、大きな目で見れば、都市づくりということと大きくつながってくるからである。

求められているのは経営の強い意思

次に、西村・常盤法律事務所のオフィスを見ていく。私どもが行った、数少ないオフィス・インテリアの設計例である。

このオフィスは六本木アークヒルズにある。現在3層にわたって使われているが、階がばらばらなので、大きなテナントが移動したのを機に、集約したいということでコンペがあり、通ったものである。現在、実設計が終わって、入札寸前という段階である。

提案のポイントは、全空間を使って、弁護士とそこに働く人々の関係性をできるだけ明確に処理することにあった。コア空間、つまり共用部分をできるだけ専有化することを提案。その空間をはじめ、弁護士が自由にどこでも移動できるように考えた。

27階から29階までの3層にわたって構成されるオフィスなので、上下階に簡単に行き来できるよう、縦に貫通する内部階段をつくることを提案し構造計算をしながら既存のスラブに穴をあけて上下階をつなぐことにした。

国際的な弁護士資格を持っている方も多し事務所なので、外国での研修経験を持つ弁護士も少なくない。事務所スタイルもアメリカ的という考え方があった。

基本的には、個室を中心に弁護士をサポートする秘書グループが展開するという構成である。秘書の数が多いのが外国の弁護士事務所と比べても特徴の一つである。

エレベーター・ロビーを入ると、ガラスでつくったレセプション・カウンターが来訪者を迎える。その脇に、法務関係の書籍・雑誌が並ぶライブラリーの空間がある。

オフィスに入ったところに、光のガ

ラス階段を設けた。すべての階段の踏みツラのところにファイバーを入れ、そこが光るように考えた。

奥行が非常に深いオフィスなので、できるだけ光に溢れたオフィスのイメージを提案している。

普段、インテリアの設計は、家具を並べて終わりというケースが少なくないのだが、このオフィスではオーナーから幾つか要望があった。

たとえば、若い弁護士が面接に来たときに、ここで働きたいと思える空間をつくって欲しい、と。また、若い弁護士が彼女をオフィスに連れて来たときに、彼女がその人と結婚したいと思えるようなオフィスに、という要望もあった。

既存のオフィスにあったライブラリーはテレビのトレンド・ドラマの舞台に使われていたそうである。今度、新しい空間が完成したときには、ライブラリーだけでなく、すべての空間がドラマの舞台として使われるようなインテリアデザインにとの注文もあった。

そういった意味では、この弁護士事務所は、働く人が喜んでくれるような、若い人がここで働きたいと思えるような、あるいは、新しいものをいつも求めているような、イメージが非常に強く求められているオフィスである。

働く場所を大事にしたい。トップの意思が明快に伝わってくるオフィスは、設計する側にとっても実にうれしいことである。

国際競争が激しさを増す中、外国の弁護士事務所が日本にも数多く入ってくる時代である。そんなときだからこそ、自分たちのオフィスをどうやってステートメントのあるものにしていくか。トップの、その強い意識は、分野を分かたずことなく、これからの時代に不可欠なものではないだろうか。